

連載

# 挑戦

～県農業試験場の  
プロジェクトX～ ⑥



大粒で病気に強くジューシー

## スカイベリー誕生秘話 (2)

いちご王国とちぎ。長年日本一の座を守ってきたが、九州勢の激しい攻勢を受け、予断を許さぬ戦国時代に突入した。

何としても王座を守り抜くため新品種を生み出さねばならぬ。県農業試験場いちご研究所の挑戦が始まった。その道のりは厳しかったが、研究スタッフは幾多の苦難を乗り越えてついに新品種の育成に成功した。10万株の中から激しいサバイバルを生き残り選抜されたのが「スカイベリー」だった。期待の星は順調に育って生産者が増加、出荷エリアも今年冬には首都圏から仙台、盛岡へ拡大する。

## 10万株のサバイバル



## エリア拡大、首都圏から仙台、盛岡へ

そのいちごは育種用温室の柱の陰にあった。日照が十分でないにもかかわらず、姿形が良く、あまり見たこともない程の大きな果実でひときわ目立っていた。重野貴主任研究員は魅せられ、迷わず選んだ。系統名は「06-36-1」。いちご王国とちぎのホープを目指して歩み始めた瞬間だった。

### 選抜された

#### 二十四系統

いちごの品種育成は根気がいる。①春に交配して、一カ月くらい経って種を採取、実生から苗を育てる②

この苗を育成用温室でトレイに植えて、五月から八月いっぱい育成③九月上旬に栽培温室に植え替える④翌年一月、赤い果実が色づく。ここで有望そうな株を選抜するのがサイクルだ。この間一年、研究員は観察データをとって、残していく株を絞り込む。



二十年一月に選ばれた株は、十八年春に交配して実生から育てた「06-36-1」など二十四系統。選抜一年目には一万株近かったものが、ここまで絞られてきた。

七月中旬、この親株のランナー（ほかく葡萄茎）ツル状で地上をはい、先端の葉が根を出して繁殖する茎が伸びて出てきた子株を切り離し、十株ずつ合計二百四十株をトレイで育てた。九月になり十五センチほどに成長した苗を温室に移して植えた。重野は「06-36-1」の成長ぶりを注意深く見守ってきた。根付きが良く、株も大きかった。やがて成長し





場に運び、病理

昆虫研究室と連

携して病原菌を

接種した。

九月に検定の

結果が出た。選

抜された二十四

系統の中で

「06-36-1」

は萎黄病に対し

て非常に強い耐

病性があること

が分かった。小

林はいちご研究

所開発研究室の植木正明室長（現安

足農業振興事務所部長補佐）にその

事を報告した。

「これなら生産者から求められて

いる病気に強い特性を持った品種

になるかもしれない。後は農家の経

営に結びつく収量性が高ければいけ

る」と研究員たちは思った。

その年の九月、予定通りに定植を

終え、十二月に果実が色づくのを

待った。成り始めの果実は大きく立

派だった。その後も果実は連続的に

収穫でき、最終的には「とちおとめ」

の一・五倍の収量が得られた。新品

種へまた一歩近づいた。

## 生産者らの注目を集める

県内のいちご生産者や関係者を対

象とする「農業試験場いちご研究

セミナー」の開催を控えた時、植木

から「今度のセミナーで果実を展示

して参加者に評価してもらったらど

うだろうか？」と提案があった。そ

こで当時の育種系統の中で成績が良

かった系統を数種選び、その果実を

展示した。

参加者からは「大きいね」「こん

ないちごなら作ってみたい」「味は

どうなの？食べさせて」といった声

が多く聞かれた。参加者の注目を一

番集めたのはやはり「06-36-1」

であった。一躍スポットを浴びる主

役の座に躍り出た。

## 新品種候補「栃木27号」

三年目の選抜で生き残ったのは

「06-36-1」などわずか六系統だっ

た。各系統とも二十株ずつ全体で

百二十株を植え、葉の大きさや成長

スピード、根の育ち、果実品質や収

量のデータを収集した。

「06-36-1」は他の系統に比べ

た苗は翌年一月から二月に赤い実を  
つけた。

全体的に順調に育った。「この中  
から新品種が生まれるかもしれない」  
。研究員の期待は大きくふくら  
んでいった。

## 試験場で耐病性を検査

三年目となる平成二十年は選抜さ

であった。

最も問題となるのは耐病性。「と

ちおとめ」は、萎黄病という病気に

罹りやすい品種だった。この病気は

大発生すると廃作の危険性があった。

その年、耐病性を担当することに

なった新任の小林泰弘主任は七月に

「06-36-1」を含む二十四系統の

いちごの苗を宇都宮市の県農業試験

れた二十四系統の  
病気に対する強さ、  
収量性、果実品質  
などの正確なデー  
タを取り始める年

所開発研究室の植木正明室長（現安  
足農業振興事務所部長補佐）にその  
事を報告した。

「これなら生産者から求められて

いる病気に強い特性を持った品種

になるかもしれない。後は農家の経

営に結びつく収量性が高ければいけ

る」と研究員たちは思った。

その年の九月、予定通りに定植を

終え、十二月に果実が色づくのを

待った。成り始めの果実は大きく立

派だった。その後も果実は連続的に

収穫でき、最終的には「とちおとめ」

の一・五倍の収量が得られた。新品





ほ場見学=いちご研究セミナー

ずば抜けて優れていた。実が大きく、当初の目標を上回った。明るい赤で、果形も綺麗な円錐形、光沢もあり見た目も良かった。食味も甘みと酸味のバランスがとれていた。何といってもジュューシーさが魅力だった。さらに病気にも強かった。

総合的に評価が高く、優れた収量

性、果実の外観、品質が認められ、平成二十二年七月「栃木27号」の系統名が付けられた。ようやく研究スタッフの努力が結実し、新品種候補に名乗りを上げた。

重野はこの時の想いを次のように話す。

嬉しかったですね。一年目の選抜でたった二株の中の一株として生き残り、二年目の選抜では柱の陰にあったのを、大きな果実に魅かれて選びました。もしあの時、選んでなかったらどうなっていた



のだろうか？。不思議な巡り合わせを感じます。手塩にかけて育ててきた三年間、私がいちご育種にかかわってきて初めて系統番号が付いたのです。感激しました。

### 現地ほ場試験でも実証

平成二十二年から県内の五名の生産者のほ場に「栃木27号」を植え付け、それぞれ異なる栽培環境で現地試験を行った。「期待の星」はいよいよ試験場の温室育ちから外に出て「世間の風」にさらされることになった。研究員たちはわが子を気遣うように見守っていた。現地栽培の結果、極めて果実が大きく外観品質に優れ



生産者や関係者によるいちご研究セミナー

収量性が高く、食味も良いなど優れた特性を有することが改めて実証された。

研究員たちは喜ぶと同時にこの新品種の特性をさらに解明する必要性を強く感じた。

その後、「栃木27号」は「栃木」と「27号」の間に小文字の「i」を入れた「栃木i27号」として、平成二十三年十一月十五日に農林水産省へ品種登録を出願申請した。そして品種特性等に関する諸々の審査を経て、平成二十六年十一月十八日に品種登録された。

## スカイベリーと命名

「栃木i27号」の流通上の呼び名(商標)は全国から公募。応募は四千三百八十八件に上った。一次審査、二次審査を経て残った九十八件の中から、外部有識者などで構成された名称選定委員会による最終審査

で「スカイベリー」と決まった。

命名の理由は、果実が大きく光沢があり、綺麗な円錐形をしていること、酸味が少なく甘いという特性を踏まえて、「大きさ、美しさ、美味しさのすべてが大空に届くようないちご」という意味と本県にある百名山の一つ「皇海山」(すかいさん)にちなんで名づけられた。

### 生産者も順調に増加

平成二十三年、現地試験を担当した五名の生産者の協力を得て、僅かだが試験販売が始まった。その後、生産者の数は順調に増え続け、平成二十六年から一般栽培が始まったのを機に百八十四戸に増加した。収量の増加とともに出荷エリアも拡大、今年の冬には首都

圏から仙台、盛岡でも流通する。

「とちおとめ」が品種登録されてから十五年。のべ十万株の中から選び出された期待の星「スカイベリー」。

いちご王国とちぎの輝くブランドとして全国にアピールするものと大きな期待が寄せられている。

いちご研究所の石原良行所長は「多くの研究スタッフの努力

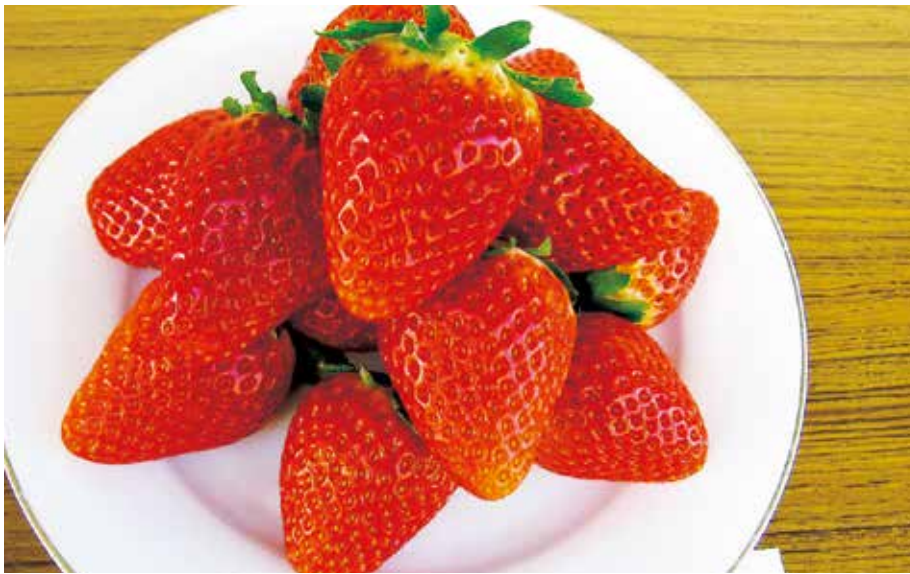
の積み重ねでスカイベリーという素晴らしい新品種が生まれました。しかし、こういうものができたのをすごいというだけでなく、育てていただきたい。消費者の皆様、生産者、流通に携わる人たちに育ててほしいとの思いがあります。今年産からは生産量が増加して店頭に並び手に



「スカイベリー」

とって食べていただける機会も増えてきました。どうぞ県産いちごの将来を担うスカイベリーを応援してください」と話している。

(文中敬称略・以下次号)



「栃木27号」